

## 「家族が語る もうひとつのハンセン病史」

2019年12月14日（土）

（2人目）

ジョゼ・アデミルソン・ダ・ロカ・ピカンソ（ブラジル 第二世代）



ジョゼ・アデミルソン・ダ・ロカ・ピカンソ氏

皆さん、こんにちは。私の名前はジョゼ・アデミルソン・ダ・ロカ・ピカンソです。ブラジル人の47歳です。ブラジル北部のアマゾン地方のパラー州にある、ハンセン病隔離施設の旧コロニーがあったマリトゥバ市に住んでいます。公務員で独身、

そして23歳の息子がいます。私は39年間、旧コロニーがあった場所にひとりで住んでいます。

MORHAN（モハン）からの声掛けで、このシンポジウムに参加させて頂きました。私の人生の物語について、特に生まれて直後に親から引き離された幼少期のことを話したいと思います。ブラジルで、何千人ものハンセン病患者が強制的に隔離されていた時の話です。

この隔離政策は1920年代から1980年代までの間に行われていました。ブラジル政府によると、この政策はハンセン病の感染から社会を守るための予防措置であったといえます。

私はマリトゥバ市で1972年11月29日に生まれました。生まれた場所は、マリトゥバ市の旧コロニーの中にあるハンセン病患者のための病院でした。私は生後間もなく保育所に預けられ、母は私に触れることも、食事を与えることも、キスをすることも出来ませんでした。母ができたのは、遠くから私を見つめることだけ。母が規則をおかさないよう、医療従事者が監視をしていたそうです。

父親や母親にとって、生まれたばかりの子どもをただ遠くから見つめる以外に何もできないことが、どれほどの苦痛であったか、想像してみてください。

その病院から私はパラー州の州都ベレンにある

「ユーニス・ウィーバー」と呼ばれる教育施設に送られました。そこはプラタにあったコロニーから、ハンセン病によって親から隔離された子どもたちを受け入れる場所で、プラタだけではなく、マリトゥバ市の旧コロニーや首都圏で生まれたハンセン病患者の子どもたちも受け入れていました。

約300人の子どもたちが施設で暮らしていました。そこには2つのブロックがあり、ひとつは男子用、もうひとつは女子用でした。この施設は修道女たちが運営しており、20人ほどの修道女が子どもたちの世話をしていました。

1日に5回、コーヒー、おやつ、昼食、おやつ、夕食と食事・軽食の時間がありました。少しの遊ぶ時間と授業の時間もありました。これが幼少期の、良かったことのすべてです。

これからお話をするのが、私だけではなく、兄弟姉妹、そして教育施設で暮らした仲間たちの現実です。私はマリトゥバ市のモハンのコーディネーターをしており、その関係でモハンの行った2012年の調査の結果も見ているのですが、その調査結果も参照しながら、ユーニス・ウィーバー教育施設にいた私と、仲間たちの話をしたいと思います。

5歳の頃のことを思い出します。虐待や体罰、空腹の日々のため、反抗的な子どもでした。仲間たちは性的虐待や、言葉による暴力、拷問に近いような身体への虐待を受けていました。

その施設の入所児童があまりに多いのに比べ、世話をする人はとても少なかったため、修道女たちは眠らせるための薬を子どもたちに与えていました。半分の子どもが眠っている間、残りの半分は入浴し、食事をしていました。そして、半分が食事をしている間、残り半分の子どもたちは入浴をしていました。施設の修道女たちから収集した情報によれば、合法・非合法に入所児童を養子に

出していたそうです。

1か月に1回の（養子を希望する人たちが）施設を訪問する日の後に、子どもたちは両親が亡くなったと聞かされるのです。（→養子に出すため、と思われる）

7歳の時、他の仲間たちと共にマリトゥバ市の国際空港に忍び込み、滑走路の照明を100個ばかり壊したことがあります。私たちはあまりに物を知らない子どもでした。空港は施設の真裏にあり、私は10人の仲間と空港に拘留され、修道女たちが迎えに来るのを待つしかありませんでした。

戻った後に何が起こったかは、想像もつかないでしょう。ベルトで激しく打たれ、体中を強く殴打されました。食事も与られず、テレビは1週間見ることが出来ませんでした。教育施設における教育やしつけ、とはそのようなものだったのです。

教育施設での話をもう1つしましょう。私は施設でそれと知らずに実の兄の頭に怪我をさせていたことがありました。私が施設に送られる前に、2人の兄、アウグストとアナニアスもこの施設に送られていたのです。人生とはなんと不思議なものでしょうか。両親から引き離され送られた施設で、そうとは知らないまま兄弟と一緒に暮らしていたとは。

1980年代には、ブラジルのハンセン病療養所の門は開かれていき、子どもたちはそれぞれの家庭へ戻るようになりました。両親のもとに戻るということになって初めて、私は過去8年間一緒に住んでいた仲間の2人が、実の兄だったということを知ったのです。施設の責任者が私たち兄弟を両親のもとに送り届けてくれました。その車のことは、よく覚えています。フスカのビートルと呼ばれていた青い車でした。車には、私たちの家族ではありませんが、私たちと同じように、今日初めてお互いが姉妹だと知ったという2人も乗っていました。

パラ州で、親から引き離され行方が分からなくなった子どもたちの集りが開かれました。オランダに養子に出されていた男性が兄弟と共に参加して話をしてくれましたが、心を突き動かされる話でした。

家に到着したときには、病気が進行していた母

が手を広げて、強く抱き締めてくれました。母親ならそうしてくれるだろうと思っていたように。母は泣きに泣いて、私たちを強く抱きしめてくれました。そして、州内に旅に出ていた父に電話をしたのです。子どもたちが戻ってきた、と伝えると、電話の向こうの父は「子ども？子どもなんていない。育ててもない。子どもなんかいやしない」と言い、「子どもたちか私のどちらかを選べ」と言いました。

母は迷わず私たちを選びました。そのような理由もあり、戻ってきた父は、私たちや母を虐待し続けました。驚いたことに、その時に私には姉がいることを知ったのです。姉は両親の最初の子どもでしたが、育てることができず、苗字すら知らない知人の家庭に養子に出したそうです。

私の人生の中で一番の悲しい出来事は、母の他界でした。1980年12月に家に戻り、母と暮らし始めましたが、母は1981年4月に他界してしまいました。私が母と暮らすことができたのは、たったの5か月しかなかったのです。母の腕の中から、母の愛から引き離されて8年間も過ごし、ようやく戻ってこられた母の元で過ごせるのは、たったの5か月だとは、なんという試練をお与えになるのか、と神に問いました。

この時のことを考えると、今でもこらえようのない怒りがこみ上げます。私たちをこよなく愛してくれた人を私たちから奪い、代わりに私たちを最も憎んでいる人の手に私たちを残していったからです。

母の葬儀は、私にとっては、生まれて初めての葬儀でした。棺桶には色とりどりの花が飾っており、まるで誕生日ケーキのように見えたため、何もわからない子どもだった私は、意味が理解できないまま、誕生日を祝うように、葬儀に居合わせた人々にジュースやクッキーを配っていたのです。その光景が、どうしても頭から消し去ることができません。

それから私たち兄弟にとって、地獄のような日々が始まりました。

父は私たちをよく殴りましたし、罰として食事を与えないことも頻繁にありました。彼はマリトゥバ市のコロニーでハンセン病患者に食事を提

供するシェフでしたので、家には食糧でいっぱいの冷蔵庫がありました。家には食べ物は充分にあったのです。想像できますか？そのような環境の中で飢えるということ。厳しい罰を受けるのでリングひとつにも触れることができませんでした。

私はこの状況に耐えられませんでした。だから私たち兄弟は、哀れに思ってくれた人の家で暮らすことにしました。地域の修道女たちも、私たちを実の子のように扱ってくれ、助けてくれました。木造で2部屋ある家に住んでいたエディルソン・コスメさんとルツィア・ロボ・ダ・シウバさんというカップルが私を預かってくれました。この家には、2人と、その姉と娘、そして私が暮らしていました。質素な家でしたが、愛に溢れていました。そこで本当の家族とは何かを知りました。裕福ではありませんでしたが、神様が少し良い方向に状況を変えてくれたように思います。米や小麦と肉などの食事を、私を含めた全員で分けて食べました。今も私を家に居させてくれたこのカップルには心から感謝し、彼らが今も生きているという幸せに感謝しています。今も近くに住んでおり、親しい友人です。

その後、兄弟全員が勉強をする機会を得ました。私の場合は、更なる苦難が待っていました。学校ではいじめを受け、同級生は私を隅に追いやりました。私はハンセン病患者の息子であり、ハンセン病の療養所に住んでいて、ハンセン病をうつすかもしれないから、一緒にはいられないと言われました。いじめられ、友人は居ませんでした。だから学校に行くことは私にとって苦痛を伴うものでした。

私は18歳で軍に入隊しましたが、ハンセン病の元療養所が住所であると申告をすると、即刻除隊されました。高校はすべての教科を合格し、2012年に大学に行こうとしたら、論文で1位になりました。大学初日に教室に座った時、頭の中にある映画が浮かんできて教室で泣き出してしまい、大学の公的経営コースを辞めてしまいました。

私はハンセン病を連想させるものは好きではありませんでしたが、1992年にモハンにボランティアとして参加しないか誘われました。モハンとは

ハンセン病による被害を受けた人たちのための社会復帰運動のことです。モハンはマリトゥバ市でも活動をしています。最初は参加を渋っていたのですが、モハンの創始者と運動の信念を知り、参加することにしました。以来27年間モハンと共に活動をし、私の街、州、そしてブラジルの団体や学校、教会でハンセン病について講演を続け、団体の強化に協力しました。

私は10年間、マリトゥバ市でボランティアをしてきました。その間私はモハンのマリトゥバ市の副コーディネーターに選ばれ、また5回コーディネーターを務めました。私はパラ州のコーディネーターでもあります。

モハンのおかげで、今では州の保健カウンセラーになりました。私は社会支援のカウンセラーもしています。私が今日持っているすべてがモハンのおかげです。また、モハンの全国コーディネーターであるアルトゥーロ・クストディオ氏には、特に感謝しています。残念ながら喉頭がんと診断され、手術を受けたため、一緒に来ることはできませんでしたが、幸いなことに手術は無事に終わり、治療を受けています。また国立ハンセン病資料館を評価していた、故・クリスティアーノ・クラウディオ・トレス氏にも感謝を。いつまでも忘れません。私の友人であり運動に敬意を持って私を宿泊させてくれた、ガイドのジェラルド・モウラ・カスカイス氏にも感謝を申し上げます。改めてモハンと私の人生に感謝します。主催者の支援を受けて、私は生まれて初めてのブラジル国外に来ました。偶然にも私が以前から、その国民を、技術を、そして制度について憧憬していた国を訪れることができました。モハンとハンセン病問題に対してのクリスティアーノの貢献を強調したいと思います。

私からの提案なのですが、モハンとハンセン病問題への彼の貢献を伝えてゆくために、このハンセン病資料館で彼を紹介するスペースがあればと思います。彼はブラジルのハンセン病の法律に大統領が署名したペンを持っています（注：2007年、ルーラ大統領〔当時〕が強制隔離対象者救済のために補償を定めた大統領令を、9月に法律11520として制定されたのを指していると思われる）。



これだけのことがあって、自分でも信じられませんが、私は今もなお、自分が生まれたハンセン病コロニーで暮らしています。公務員として、ハンセン病の情報センターで働き、ハンセン病によって引き離された子どもたちの全国組織のメンバーをし、ハンセン病問題で苦しんでいる人たちの権利を守るための社会運動であるモハンで27年以上も活動しています。

これがブラジル政府へのメッセージです。私たちとハンセン病患者の子どもに対して、政府が行ったこと全てに対して公的な謝罪を求めます。社会から愛を受けずに生を受け、差別された幼少時代を過ごし、十代の頃には地域社会や学校でいじめられ、大人になってからは侮蔑と隔離による差別を受けた、子どもであることを許されなかった子どもたちに、経済的な支援を行ってください。子どもたちの多くはうつ病となり、精神障がいを持っています。薬物中毒や、アルコール中毒に苦しむ者も少なくありません。仕事の機会が与えられず、自分の過去を苦にして、家族を持つことができなかった者も多くいます。自分の人生に起こったことに耐えられずに自死した人もいと報告されています。

信じられるかどうか分かりませんが、史実によるとユニス・ウィーバー夫人は1950年代の国際ハンセン病学会の会期中に、(ハンセン病を患う両親のもとに生まれた子どもたちを、両親から引き離す必要はないとした) 法的な拘束力のあるものではありませんが、趣意書に署名をしています。当時、科学的には、ハンセン病を患う両親のもとに生まれた子どもたちを、両親から引き離すことは誤りではなかったかと考えられ始めていました。それもあってか、各国は趣意書に賛同し、子どもを引き離すことに反対するようになったのです。

ユニス・ウィーバー教育施設が、ユニス・ウィーバー自身が1950年代には署名をした趣意書に従っていたならば、1972年に私は両親から引き離される必要はあったのでしょうか？

ブラジル政府は、当時の大統領ルイス・イナシオ・ルーラ・ダ・シルヴァの主導により、1920年代から1980年代にかけて、連邦法によって隔離さ

れていたハンセン病回復者に対して補償金を支払う法律が制定されたことは、記憶すべきことです。ハンセン病に感染したため、隔離されたため、後遺障がいがあったため、家族から引き離されたため、彼らは苦しんでいました。

ブラジル政府に伝えたいと思います。私がお願いをしている、などと思わないでください。公的な謝罪と補償金などでは、私たちが味わった苦しみを拭うことは到底できません。

笹川陽平氏が今年(2019年)の6月～7月にブラジル、特にパラ州を訪問してくれたことに感謝を申し上げます。知事による公聴会に参加されましたが、その際に、ハンセン病の(簡易)診断には特別な機材は不要で、ペンが一本あればいいということをし、そして、ハンセン病対策チームは、他の関係者と協力をしながらどんどん診断をしていくべきだということをお話されました。もしも新規診断患者が増えたら、それは咎められることではなく、むしろ祝うべきことです。これまで診断されなかった人たちに、正しい診断が下されたと言うことなのですから。

また私たちの人権と権利のために、多くの扉を開いてくれたアリス・クルス氏(ハンセン病(元)患者と家族の差別撤廃に関する国連特別報告者)にも感謝したいと思います。

ご清聴ありがとうございます。私の人生の物語を聞いてくれてありがとうございます。私たちを日本に迎え入れて下さったことにお礼を申し上げます。

(翻訳：Carlos Alberto Abelheira da Silva [カルロス・アルベルト・アベレイラ・ダ・シウバ]、吉國 元)